

⑤日本大学工学部(留学生数※13名)

震災後、日本人学生、留学生を問わず災害救助法適用地域の学生に対し、クラス担任を通じて安否確認を実施した。留学生の中にはいち早く帰国する者もあり、安否確認は困難を極めたが、最終的に留学生全員の無事を確認した。

5月の新学期開始までには、ほとんどの留学生が日本に戻り新学期開始には影響なかった。

⑥福島工業高等専門学校(留学生数※13名)

多くの留学生が磐陽寮にて被災した。マレーシア大使館から迎えの車がきて、マレーシア以外の留学生も含め東京へ避難した。新年度編入学する予定の留学生5名を他の高専へ配置換えした。

マレーシア大使館からの要請により、在学中のマレーシアからの留学生5名を他の高専へ転学させた。また、インドネシア国費留学生1名からの強い転学希望があり他の高専へ転学させた。

※留学生数は平成22年10月1日現在

9 主な外国出身住民コミュニティの支援活動に関する聞き取りの実施

今回の震災や原発事故では、多くの外国出身住民コミュニティが支援活動を行った。その内容を聞き取った結果は、以下のとおりである。

(1) NPO法人ルワンダの教育を考える会



震災から2週間後の3月25日に、当時避難所になっていた県立福島高校でルワンダコーヒーの提供を開始した。これを皮切りに県内各地の避難所や仮設住宅に出向き、ルワンダコーヒー・紅茶を片手に会の代表であるルイズさんとの会話などを楽しむ「ルワンダカフェ」を開催した。ルイズさんは、「私もルワンダ内戦で家や家族を失い、難民キャンプで過ごした経験があります。避難されている方々の気持ちが痛いほどわかります」と言っている。現在も継続して「ルワンダカフェ」を開催している。

(2) 福島グローバルロータリー



3月27日、パキスタン出身のメンバーが中心になって、当時避難所になっていた県立郡山高校に約300食、郡山市立橘小学校に約50食のパキスタンカレーの炊き出しを行った。その後は、他のボランティア団体と協力して南相馬市鹿島区のがれきの撤去等を行った。

(3) Heart for Haragama



相馬市にある被災した「原釜幼稚園」を再建するため、震災後、県国際交流協会の元国

際交流員でカナダ出身のマクマイケルさんが中心となり、期限付きで県内のJET青年等とともに「heart for haragama」を設立した。インターネットで募金を呼びかけるとともに、3月下旬から月1~2回原釜幼稚園を訪問し、お米等の支援物資を届けたり、園児との交流会等を開催したりした。

(4) 在日日本大韓民国民団福島県地方支部



4月15日に、いわき市役所と福島市役所、そして郡山市内の避難所になっているビッグパレットふくしまに、東京本部から届いたペットボトルの水やレトルトごはん、韓国のりなどの支援物資を届けた。11月には韓国のお菓子メーカーからの支援物資を県内の幼稚園等に届けた。

(5) HAWAK KAMAY FUKUSHIMA



震災を機にフィリピン出身者のネットワークを広げようと、4月17日に自助団体を設立。6月8日、福島市内の避難所にビーフン100食の炊き出しを行い、その後3か所の避難所でも炊き出しを行った。11月からは仮設住宅2か所を訪問し、ビーフン等の炊き出しとフィリピンの歌や踊りの披露を行った。

(6) FuJET



県内のJET青年のネットワークであるFuJETでは、震災後の4~5月にかけての週末に、近くに住むJET青年等10人程度が集まり、いわき市や相馬市の沿岸部のがれきの撤去を行った。5月~7月にかけては、福島市内に住むJET青年が5~6人集まり、月1回避難所となっていたあづま総合運動公園の体育館に行き、避難している子どもたちの誕生会などの交流を行った。夏には、相馬市内の子どもたちとの一日キャンプなども行った。

(7) NPO法人ふくかねっと



韓国と福島の文化交流を目的とするふくかねっとでは、7月3日に避難所となっていたあづま総合運動公園で450食の韓国料理の炊き出しを開始した。その後も継続して仮設住宅への韓国料理の提供等を行った。